



新年あけましておめでとうございます

仕上げの3学期、進学、進級とつながる学期に！

令和2年、新しい年が始まりました。みなさまには、すがすがしい希望に満ちた新年をお迎えることとお喜び申し上げます。旧年中は、保護者・地域のみなさまには、学校教育へのご支援ご協力を賜り、誠にありがとうございました。3学期も昨年同様、子どもたちへの励ましや賞賛の言葉かけを、どうぞよろしく願いいたします。

さて、今日から3学期が始まりました。新しい年のスタートの学期であり、今年度のもとの学期です。3学期はあっという間に過ぎますが、次の学年へつながる大切な学期でもあり、この期間を有意義に過ごすことは、次の1年の成功にもつながります。子どもたち一人ひとりが「めあて」をしっかりとって、一生懸命に努力し、最後まで「やり抜く」充実した3学期にしてくれることを願っています。

子どもたちが元気に楽しく目標をもって学校生活が送れますように、私たち教職員もプロ意識を高く持ち、『心豊かに たくましく やり抜く子ども ～一人ひとりがキラリ輝く布引の子～』という学校教育目標のもと、「深く 誠実に しなやかに」を合言葉に誠心誠意努力してまいりますので、どうぞよろしく願いいたします。

今年は子(ねずみ)年です

なぜ鼠(ねずみ)ではなく子(ね)なの？

文献によると、十二支はもともと動物とは無関係の単なる記号として使われていましたが、十二支をおぼえやすくするために、動物にあてはめ親しまれるようになったと言われています。

では、「子」がなぜ「ねずみ」になったか。それは、もともと「子」の文字には「増える」という意味があり、ねずみもたくさん子どもを作るので、「子」をねずみにしたと言われています。

したがって、子は十二支のはじめの年であることから、今年は「子孫繁栄」の年、「全く新しいことにチャレンジするのに適した年」になるという考えが多いようです。今年は、「子」どもが主役で、かつ東京オリンピックイヤーで経済や世の中も盛り上がるといいですね。



卒業証書授与式は、全校で創る“小学校最後の授業”です

学校では、その卒業証書授与式を、小学校での学習の集大成として“最後の授業”の場であるととらえています。そして、『思い出・感謝・希望』をテーマに、子どもたちにとって感動と未来への思いに満ちた厳粛な中にも温かい式になるよう、全教職員で指導をしていきます。卒業生はもちろん、1～5年生の子どもたちも含め全校のみんなで創る“授業”です。

6年生の保護者のみなさまには卒業式の意義をご理解の上、“最後の授業”にふさわしく、小学生らしい姿で臨めるよう、下記のことについてご理解とご協力をお願いいたします。

- *過度な衣装は控え、小学生らしいものとしてください。
- *式場での靴は、通常と同じ上靴とします。
- *髪型についても、普段の小学生らしいものとしてください。



保護者アンケートご協力のお願い

本日、保護者アンケートの用紙（子どもさんお一人につき1枚）を配付しました。布引小学校の教育活動について忌憚のないご意見をお聞かせくださいますようお願いいたします。いただきましたご意見を参考にしながら、次年度以降の教育活動の計画を立てていきます。締め切りは、1月14日（火）です。

いじめは、なぜ起こるの？

大津市で起きた中学生によるいじめ自殺事件は、全国に大きな問題を提起しました。

この事件は、「いじめ防止対策推進法」を生み、学校で「いじめ防止基本方針」の策定を義務づけられ、また、それまでの「道徳」の授業を「特別の教科 道徳」と教科として引き上げ、教科書を使った授業が義務づけられるほど、社会的に大きな影響をもたらした事件です。だから滋賀県のいち学校として、また昨年度は、神戸市で起こった教員間のいじめ事案（ハラスメント事案）もあり、1年の学校便りの中で、一度は触れないわけにはいかないと思ひ執筆しています。



いじめについては、はずかしながら私は若い頃、保護者に教えられました。まだ、いじめの定義もなく「いじめられる側にも問題があるよな」そんな風潮の時代です。担任の子どものことは、独身で若くても保護者より誰よりも知っていると勝手に思いこんでいた若造でした。自虐ネタです。

「先生！いじめはね、いじめたいと思うかどうかは心の自由ですよ！人は心の中は自由なんです！でもね、いじめの言葉を発したり、行動に出した時点で、それはいじめです！」と涙ながらに訴えてこられました。そのときに、ハッとしたのです。その通りと思いました。そんな簡単なことに気づかず、きれい事ばかり客観的に話していた自分の認識の甘さを恥じ、すぐ行動にうつしました。

大人になった二人は（もう親になっていますが）、今では大のなかよしで、いじめられていた子どもの結婚披露宴に、いじめていた彼女といっしょに私も参列しました。

法によると、いじめとは、簡単に言えば①被害者・加害者になんらかの人間関係があり、②被害者が苦痛を感じているものはすべていじめと認定されます。つまり、いじている側が「いじている」と認識しているかどうかではなく、いじめられている側が「いじめられている」と感じれば、それはいじめです。加えて、いじめかどうかを見ている人が決めることではないのです。

したがって、この定義によれば、人間関係を持たない修行僧または聖人のような達観した方以外は、ほぼいじめの加害者、もしくは被害者の経験があるはずです。

脳科学者の中野信子さんによれば、集団を作ることはヒトが生存するための戦略であり、それを阻害する脅威に備える仕組みを身体に持つと言います。したがって、共同体にとって、有害な存在、たとえば①協力的な行動を取らない人、②協力の邪魔をする人、③ズルをする人等を見つけ出し、排除しようとする機能が脳に備え付けられていると言います。そしてその制裁行動を「サンクション」と呼びます。いじめの言動そのものです。

集団の和を乱すような行動を見ると不快に思ってしまうのは、この機能の発現かもしれません。しかし、このサンクションは発動すべきでないときにも発動する時があり、それを「オーバーサンクション」と呼びます。要するにゲームのないいじめです。

いじめには、大別するとサンクションとオーバーサンクションの2種類があり、いじめの重大事案につながるのは、ほとんどの場合がオーバーサンクションであると言われています。

では、なぜ大人はいじめを発見しづらいのか。答えは簡単です。

保護者サイドで考えれば、いじめられている子どもが「いじめを親にきちんと伝えないから、もしくは伝えたくないから」です。教師サイドで考えれば、いじている子どもは「教師にわからないようにやるのがいじめ」だからです。そして、いじめはダメだと制御する脳の前頭葉にあると言われて「共感」という機能は少しずつ育つものであり、子どもは未発達だからです。

本校では、いじめに対して大人が子どもに対して何か対策を打つということだけでなく、子どもの集団そのものを強くすることに力を入れています。強くするとは、子ども同士の良好な人間関係を育て、いじめを含めた生活上の諸課題に対して解決能力をはぐくむことです。子どもを子ども社会の中で育てていく環境作りです。

学級会、係活動、当番活動、委員会活動、児童集会、人権週間のクラスの取組等、そんな自治的な力を育てる特別活動が、いじめをなくす子ども集団の強化につながっていると思っています。

人権週間のクラスの取組ポスターを見て、6年生の女の子がこんなことを言っていました。

「布小はいじめがないねん。だからいごちいいねん。」

こんな声がたくさん響く学校にしたいものです。



3年生の学級会の様子